



## 目次

はじめに	2	⑥ 高校生に感動を与えるもの	65
本報告書の要約	2	1 感動体験の有無	66
① 調査の意図とサンプル	5	2 感動の構造	70
1 調査の意図	5	3 感動の規定要因	71
2 調査対象校の特質	6	4 感動と学校文化	74
3 調査対象者の特質	8	⑦ オムニバス高校生——5つの顔——	79
② 高校生とレコード・本・雑誌	10	1 口紅をつける女子高校生	80
1 高校生の小遣い	10	2 疲れた高校生	82
2 レコード(カセット)・ライブラリー	12	3 勉強をよくする高校生	84
3 高校生と本・雑誌	15	4 運動部に打ち込む高校生	86
4 高校生と音楽・読書	18	5 詩や小説を書く高校生	88
③ 学校の外の高校生	19	おわりに	92
1 高校生の行動経験	20	付録	93
2 高校生の休日の過ごし方	24	● 調査票見本	93
④ 高校生の友人グループ	36	● 単純・クロス集計	105
1 友人グループの特徴	37		
2 友人グループでの話題	39		
3 友人グループでの行動	41		
4 友人グループの機能	42		
5 反学校的友人グループ	43		
6 好きなタイプと嫌いなタイプ	47		
⑤ 高校生の自我像	50		
1 友だちからどう思われたいか	51		
2 友だちからどう思われたくないか	52		
3 自我像の構造	52		
4 生徒の属性と自我像	55		
5 生徒の自我像を容れさせるために	58		



## はじめに

「モノグラフ高校生」Vol.2が高校生の学校内の生活に焦点をあてたのに対し、今回のVol.5は、高校生の学校外の生活に焦点をあてる。

学校内で自分を生かす場を見い出せない生徒が学校外に適応の場を見出すという視点ではなく、生徒の校外生活にはそれ独自の価値があること、さらには、学校外で生き生きした活動の場を見い出せない高校生が逆に学校の生活に逃避するという視点である。しかし、データをみていく過程で、この視点が必ずしも有効ではない事態にも、多々遭遇した。

ともあれ、今回の報告が、高校生の校外生活の実態とその意味について、多少なりとも明らかにでき、今後の高校教育のあり方を考えるのに役立てば幸いである。

今回も調査票の作成・データの分析にあたっては、深谷昌志奈良教育大学教授をはじめ、

深谷和子、明石要一、穂坂明德、高橋美恵、横井富美子の各氏から貴重なご助力をいただいた。

また調査の実施・刊行にあたっては、福武書店の全面的なご協力を得た。福武書店教育研究所の加藤智禧氏、荒木美紀子氏に深く感謝したい。最後になったが、調査にご協力いただいた高校の先生方、生徒諸君に心からお礼申しあげる。

本報告の執筆分担は下記のごとくである。

- ① ⑥ ⑦-2,3 武内 清
- ③ ⑦-1 耳塚寛明(東京大学助手)
- ② ⑤ ⑦-4 樋田大二郎(東京大学大学院)
- ④ ⑦-5 苜谷剛彦(東京大学大学院)

昭和57年2月

武蔵大学教授 武内 清

## 本報告書の要約

### ① 調査の意図とサンプル

- ① 本調査は、高校生の校外生活の実態とその意味を明らかにすることを目的とした。
- ② サンプルは、10校の普通高校より2,497名(男子1,205名、女子1,284名、不明8名/1年803名、2年792名、3年896名、不明6名)である。
- ③ 調査対象校を4年制大学進学希望率によりAグループ校(同75%以上、4校)、Bグループ校(40%以上、3校)、Cグループ校(39%以下、3校)に分けた。
- ④ 調査時期は、昭和56年5月～6月である。

### ② 高校生とレコード・本・雑誌

- ① 毎月決まって小遣いをもらうのは、約8割(77.6%)で、1ヵ月の平均は4,838円であ

る。

② レコード(カセット)・ライブラリーは、1人平均35枚となっている。その内訳はフォーク・ニューミュージック10枚、歌謡曲10枚、ロック8枚、クラシック5枚、ジャズ2枚である。高校生にとって音楽は生活に欠かせないものである。

③ Aグループ校の生徒はクラシック(9枚)、Cグループ校の生徒は歌謡曲(14枚)と平均より多く持っているという学校差もある。

④ 高校生の蔵書数は、1人平均65冊である。その内訳は文庫本24冊、マンガ単行本22冊、文芸書8冊、学習参考書11冊と、軽い読みものが多い。

⑤ 高校生は、本・雑誌を1ヵ月平均して9冊読んでいる。その内訳はマンガ3.4冊、趣味の雑誌2.2冊、若者向けの雑誌2.1冊、小説1.4冊と、軽い読みものと若者向けの雑誌が人気を呼んでいる。

- ⑥ Aグループ校では小説が、そしてCグループ校ではマンガと若者向けの雑誌がよく読まれているという学校差もある。

## ● 学校の外の高校生

- ① 高校生がこの1年間にした行動経験のなかで、おとなからみると非行的とみなされる行動の率は、決して少なくない。飲酒(33.1%)、喫煙(16.4%)、バイク(16.2%)、ディスコ(8.9%)などである。
- ② 異性との交際は、ラブレターを出す(10.0%)より、街で気軽に声をかける(29.1%)、そういうストレートさをいまの高校生は身につけている。
- ③ 高校生は文字や文章からそれほど疎遠ではない。日記をつけたことのある高校生は、40.4%、詩や小説をつくったことのある高校生は28.1%いる。
- ④ 高校生の行動経験は、学年が上がるにつれて豊富になる。とりわけ非行的経験(酒、タバコ)、仲間との行動(喫茶店、友人宅泊、旅行)、口紅・パーマ、アルバイト経験が増加する。高校生は、学校外で着実におとなへの行動経験を獲得している。
- ⑤ 高校生の休日の過ごし方のベスト3は、いずれも家のなかですぐすことである。つまり、フォーク・ロックをきく(48.5%)、何もしないでんびりすぐす(38.6%)、歌謡曲をきく(31.6%)。それにつづくのが仲間とひとりの行動である(友人宅21.4%、友人と街をぶらつく18.5%)。
- ⑥ 高校生の休日の過ごし方を因子分析により構造的にとらえてみると、「つきあい」「スポーツ」「趣味」「家庭」「休養」という5つの因子に分かれる。
- ⑦ 男子の休日の過ごし方は「スポーツ」と「趣味」が多く、女子の休日の過ごし方は「つきあい」が多い。
- ⑧ 学校グループ別にみると、Aグループ校の生徒は、個人的行動や趣味にかかわる活動が多く、Cグループ校の生徒は、友人といっし

よの活動が多い。

- ⑨ 学校適応度の低い生徒ほど、休日は仲間と過ごすことが多い。学校外の仲間集団は学校生活で傷ついた自我をいやす問題解決の場として機能している。

## ● 高校生の友人グループ

- ① 高校生で、仲のよい友人グループをもっているものは93.0%いる。グループの平均人数は6.1人である。
- ② 友人グループの特徴としては、1)同じ学校(77.5%)、同じ学年(94.0%)、同性(88.8%)の生徒からなる。2)グループメンバーはいつも決まっているが(83.8%)、リーダーは決まっていない(80.2%)。3)グループでよく話題になることは、テレビやタレントのこと(73.8%)や異性のこと(66.6%)であり、社会問題(11.7%)や文学・哲学・芸術のこと(12.4%)は、あまり話題にならない。4)グループのメンバーとはいっしょに学校から帰り(77.3%)、電話でも話をよくする(60.5%)。
- ③ 友人グループの機能をみると、1)悩みごとを相談しあう(74.7%)、いっしょにいるとほっとした気持ちになる(81.9%)という自我の安定化機能と、2)自分の欠点に気づかせてくれる(79.2%)、友人を模範とする(72.2%)という教育的機能の2つがある。
- ④ 友人グループでの話題についてみると、Aグループ校には勉強や入試のことがよく話題になる(64.4%)アカデミックな生徒文化が存在し、Cグループ校にはテレビやタレントのことがよく話題になる(79.9%)遊び志向の生徒文化が存在していることがわかる。
- ⑤ 学校や教師に対抗的な反学校グループに所属するものは21.8%いる。反学校グループのメンバーには、他の学校の生徒(29.7%)や異性(19.6%)も含まれることが多い。いっしょにいるとつい悪いことをやってしまう場合もある(47.0%)。このグループは、学校に不適応で、毎日がたいくつな生徒の生抜きの場ともなっている。

- ⑥ 高校生にいろいろなタイプを評価させると、運動部の練習にはげんだり(57.1%)、文化祭・体育祭の準備を一生懸命やったりする(47.6%)ガンバリ・タイプと、友だちづきあいのよい(46.1%)、ユーモアのある(42.8%)交友タイプが人気を得ている。嫌われるタイプは、暴走族(45.4%)や、ツッパリタイプ(44.6%)と、孤独(53.0%)で、本の虫(43.0%)のまじめタイプである。
- ⑦ 同質的でぬるま湯のような仲よしグループのなかだけで生活していると、自立の遅れが心配される。

## ⑥ 高校生の自我像

- ① 高校生は友人たちから、友だちづきあいがよい(86.6%)、ユーモアがある(86.0%)、頼りがいがある(78.8%)など、友人を大切にすると人間だと思われたがっている。
- ② 逆に、反抗的(25.0%)で、ツッパっている生徒(11.4%)やそだちがよく(34.0%)、先生にほめられる(23.4%)生徒とは思われないと思っている。
- ③ 自我像には、成人志向、友人志向、自律志向、反抗志向の4つの側面がある。
- ④ 成人志向が強いのは男子、3年、Aグループ校の生徒、友人志向が強いのは女子、3年、B・Cグループ校の生徒、自律志向が強いのは男子、Aグループ校、学校適応度の高い生徒、反抗志向が強いのは男子、Cグループ、学校適応度が低い生徒という差異もある。
- ⑤ 生徒の自我像の変容のためには、生徒の学校への適応度を高め、友人集団のあり方を改善していくことが大切である。

## ⑥ 高校生に感動を与えるもの

- ① 物事の見方や考え方が変わるような感動を経験したことのある高校生はとても多い。1人平均7つの分野の感動経験をもっている。
- ② 高校生の感動体験のベスト3は、1位テレビ・映画(84.8%)、2位友人とのつきあい

- (80.7%)、3位小説や詩を読んで(68.8%)である。
- ③ 男子より女子の方が感動体験が多く、その分野もテレビ、マンガ、友人、異性とのつきあいと多彩で、学校外にひろがっている。
- ④ クラブ・部活動参加者は、それぞれの分野の感動体験(運動部=スポーツ、文化部=芸術)だけでなく、学校内及び学校外で多くの感動体験を経験している。
- ⑤ 成績上位者、4年制大学進学希望者、Aグループ校の生徒、父親の学歴の高い生徒の感動体験は、「勉強」と「芸術」という学校内やおとなから期待される分野が多く、それ以外の生徒は学校外の「マスメディア」(テレビ、マンガ、歌謡曲)に感動体験を求めるようになる。
- ⑥ 学校外の「マスメディア」との接触による感動体験は、成績下位者、非進学者、Cグループ校の生徒に多いが、彼らは傷つけられた自我の回復の場をそこに求めており、多少享乐的、消費的、受身的な感動体験であっても、それらのメディアをとおして社会性の発達や人格の形成がはかられている。
- ⑦ 学校の内外で高校生に感動を与える機会をつくっていくことが大切といえよう。

## ⑦ オムニバス高校生

- ① 高校生の行動や意識の断面を切り取って、その象徴的意味を5つの側面から明らかにした。
- ② その5つとは、1)新しい世界への旅立ちを口紅に象徴させる女子高校生、2)おとなへのいらだちから疲れきった高校生、3)素直すぎて脆弱な勉強好きの高校生、4)学校生活をエンジョイする運動部の生徒、5)かつての文学青年とはかけ離れた現代の文学青年たち、である。

現代の高校生は、学校生活のありように規定されつつも、学校外でさまざまな出会いや行動経験をもち、心理的社会的停泊点を求めながら、おとなに向かって着実に歩んでいる。

## ① 調査の意図とサンプル



### 1. 調査の意図

高校生が平日学校にいる時間は6～8時間で、1日の約4分の1から3分の1である。そして残りの4分の3から3分の2の時間を、学校外で過ごしている。また休日も含めれば、高校生の校外生活の占める割合は、きわめて大きい。

情報化社会といわれて久しいが、情報化社会ではマスメディアの発達により、学校教育の占める比重は小さくなり、人々は多様な情報媒体から知識・技術・態度を学んでいく。社会の高学歴化にともない、学校の知識独占機能も薄れ、学校の権威は相対的に低下している。

このような現代の高校生の置かれた状況を

考えると、現代の高校生にとって、学校外の生活の比重は決して小さくない。高校生は学校外でさまざまなことを学んでいる。学校外での学習や体験が学校内での学習や生活以上に大きな意味をもつ場合もある。また学校外で学ばれたことが、学校内にもちこまれていることも十分考えられる。

そこで今回の調査は、「モノグラフ高校生 Vol.2、高校生の生徒文化」が高校生の学校内の生活に焦点をあてたのに対し、高校生の校外生活に焦点をあて、①高校生の校外生活の実態、②そこで生み出される態度・価値志向、③校外生活と校内生活との関連という3つの

側面を明らかにする。これまで比較的なおざりにされていた高校生の校外生活の実態とその意味について、真正面から問おうとするものである。本調査のデータと分析は、高校の学校経営と生活指導の資料としても役立つものと確信する。

調査票の全体は巻末に付したとおりである。高校生の校外生活の実態とその意味および学校生活との関連を知るために、次のような内容の調査項目となった。

「学校名」(Q1)、「学年」(Q2)、「性別」(Q3)、「生活時間」(Q4)、「小遣い」(Q5)、「本・マンガ・レコード(カセット)の所持状況」(Q6)、「本・マンガ・雑誌購読状況」(Q7)、「学校外生活行動」(Q8)、「友人グループ」(Q9)、「自我像」(Q10)、「高校生の行動

評価」(Q11)、「女性観」(Q12)、「休日の過ごし方」(Q13)、「感動体験」(Q14)、「学校生活」(Q15)、「学校経営」(Q16)、「部活動」(Q17)、「成績」(Q18、Q19)、「進路希望」(Q20)、「父職業」(Q21)、「父母学歴」(Q22)。

なお、各章の考察と質問項目の対応は下記の通りである。

- ①章 調査の意図とサンプル—Q1-3、Q16-22
- ②章 高校生とレコード・本・雑誌—Q5~7
- ③章 学校の外の高校生—Q8、Q13
- ④章 高校生の友人グループ—Q9、Q11
- ⑤章 高校生の自我像—Q10
- ⑥章 高校生に感動を与えるもの—Q14
- ⑦章 オムニバス高校生—Q1~22

それぞれの質問項目は適宜各章でクロス集計等に用いられ考察されている。

## 2. 調査対象校の特質

今回の調査対象校は、3地域(東京、名古屋地区、京阪神地区)より、学校格差を考慮して普通高校を10校選んだ。10校の内訳は、公



立普通高校8校、私立普通高校2校である。それぞれの学校の特色を表1-1に示した。

学校グループ(格差)別にみると、Aグループの学校(A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>、A<sub>3</sub>、A<sub>4</sub>)は、4年制大学進学希望者が75%以上いて、東大にも入学者を送り出す進学校である。中学時代の成績が5段階の最上位が5割以上いる学校である(中高一貫教育のA<sub>1</sub>を除く)。父親の学歴も高い。学校経営の特色は、受験とクラブ・部活動および学校行事と多彩である。学校の規則はゆるやかである。

Bグループの学校(B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>)は、4年制大学進学希望者が4割台で、短大希望者と就職希望者がそれぞれ2割近くいる準進学校である。中学時代の成績は、最上位が1割前後いる。父親の学歴は中位である。学校経営の特色は、受験指導と部活動を重視する学校もあるが(B<sub>2</sub>)、Aグループ校に比較すると就職指導と校則がかなり重視されるようになっている。

Cグループの学校(C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、C<sub>3</sub>)は、4年制

大学進学希望率は4割以下で、短大へ2割、就職希望者が3割近くいる非進学校である。中学時代の成績が最上位は5%未満である。父親の学歴も高くない。学校経営の特色は就職指導と厳しい規則である。

同じグループ内の学校でも、学校によってその伝統、組織、経営方針、教師文化、生徒文化等が違い、それがさまざまな形で生徒の

行動や価値形成に影響を与えていることが考えられる(そういう観点からの分析については、松原治郎他「高校生の生徒文化と学校経営(1)」東京大学教育学部紀要20巻、1981年参照)。しかし本報告では、同じ水準(グループ)同士の学校は、生徒の学力水準や学校経営の特色が類似していることから一括して扱い、学校格差(グループ)文化の影響をみることにする。

表1-1 調査対象校の特質

	学校名	所在地	学校創立年代	4年制大学 進学希望率	東大合格者数 (S.55)	京大合格者数 (S.55)	中学時の成績 (5段階の最上位の割合)	学校経営の特色 (そう思うの割合)					父親の学歴・高 等教育卒の割合
								受験指導	クラブ・部活動	体育祭・文化祭	就職指導	きびしい規則	
Aグループ校	A1	東京	昭和(戦後)	87.1	a	d	11.8	90.8	78.2	93.7	1.8	16.6	74.9
	A2	岐阜	大正	95.8	a	b	66.0	100.0	22.3	56.4	5.3	24.5	35.1
	A3	東京	明治	78.7	b	c	66.5	76.8	43.4	60.7	4.0	9.9	51.5
	A4	三重	昭和(戦後)	81.5	c	b	51.9	95.2	20.4	42.6	4.4	49.6	30.0
Bグループ校	B1	東京	昭和(戦前)	45.5	d	d	3.5	37.7	48.6	40.9	30.4	53.7	49.8
	B2	愛知	昭和(戦後)	43.4	d	c	12.6	96.3	88.5	30.5	58.4	78.8	13.8
	B3	京都	昭和(戦後)	40.1	d	c	8.4	48.4	38.4	38.4	48.4	75.6	/
Cグループ校	C1	東京	昭和(戦後)	28.3	d	/	0.4	30.6	39.2	43.5	49.8	63.1	23.1
	C2	愛知	大正	24.2	d	d	2.3	56.9	45.0	20.0	48.1	83.5	17.7
	C3..	兵庫	明治	10.3	d	c	4.1	40.0	17.8	28.9	32.6	72.2	15.6

\*私立男子校 \*\*私立女子校 無印 公立男女共学校

大学合格者数 a=11人以上 b=10人以下 c=5人以下 d=0人

### 3. 調査対象者の特質

今回調査対象になった生徒の基本的属性は以下の通りである（総数 2,497名）。

数字は人数、（ ）内は％である。

(1) 学年別

高1	高2	高3	不明
803	792	896	6
(32.2)	(31.7)	(35.9)	(0.2)

(2) 性別

男子	女子	不明
1205	1284	8
(48.3)	(51.4)	(0.3)

(3) 対象校別・性、学年別

学校名	全体	男子	女子	不明	1年	2年	3年	不明
A <sub>1</sub>	271	267	0	4	88	91	90	2
A <sub>2</sub>	94	57	36	1	0	0	93	1
A <sub>3</sub>	272	136	136	0	94	91	87	0
A <sub>4</sub>	270	174	96	0	89	90	91	0
B <sub>1</sub>	257	118	139	0	90	86	81	0
B <sub>2</sub>	269	147	122	0	91	89	89	0
B <sub>3</sub>	279	114	162	3	89	90	98	2
C <sub>1</sub>	255	124	131	0	88	82	85	0
C <sub>2</sub>	260	68	192	0	85	83	92	0
C <sub>3</sub>	270	0	270	0	89	90	90	1

(4) 部活動

運動部熱心	運動部不熱心	文化部熱心	文化部不熱心	以前参加	不参加	不明
719	241	326	259	640	255	57
(28.8)	(9.7)	(13.1)	(10.4)	(25.6)	(10.2)	(2.3)



## (5) 中学時代の成績

上	の中上	中	の中下	下	不明
500	722	803	300	142	30
(20.0)	(28.9)	(32.2)	(12.0)	(5.7)	(1.2)

## (6) 現在の成績

上	中	下	不明
575	926	951	45
(23.0)	(37.1)	(38.1)	(1.8)

## (7) 進路希望

就職 家業・家の手伝い	各種・ 専修学校	短大	私立大	国公立大	その他	まだ決め ていない	不明
369	199	293	393	876	20	311	36
(14.8)	(8.0)	(11.7)	(15.7)	(35.1)	(0.8)	(12.5)	(1.4)

## (8) 父親の職業

専門技術	管理	事務	販売	農林・漁業	自営・商工業	運輸・通信
312	473	282	110	45	317	126
(12.5)	(18.9)	(11.3)	(4.4)	(1.8)	(12.7)	(5.0)

労務・職人	サービス	その他	不明
347	51	104	330
(13.9)	(2.0)	(4.2)	(13.2)

## (9) 父親の学歴

初等	中等	短大・各種学校	高等	その他	父いない	不明
502	670	43	769	51	52	410
(20.1)	(26.8)	(1.7)	(30.8)	(2.0)	(2.1)	(16.4)

## (10) 母親の学歴

初等	中等	短大・各種学校	高等	その他	母いない	不明
508	1,063	176	267	56	21	406
(20.3)	(42.6)	(7.0)	(10.7)	(2.2)	(0.8)	(16.3)

調査時期：昭和56年5月～6月

調査方法：学校を通しての質問紙調査

## 高校生とレコード・本・雑誌

この章では、高校生の校外生活を青年文化とのかかわりが深い、レコードや本・雑誌の側面から考えてみよう。



### 1. 高校生の小遣い

平均で4,800円、3年生では12,000円  
以上もらつ者が12.3%も——

レコードや本について検討する前に、まずは小遣いについてみてみよう。

図2-1でまず、高校生の小遣いのもらい方をみてみよう。図が示すように47.4%の生徒が毎月決まった額をもらっている。これに、毎月決まった額プラス必要に応じてという者も加えると、全体の77.6%が毎月決まった額をもらっていることになる。これを性別に比較すると、男子の方が毎月決まった額をもらっている生徒が、やや多くなっている。

多くの生徒が毎月決まった額をもらい、

図2-1 小遣いのもらい方 (%)

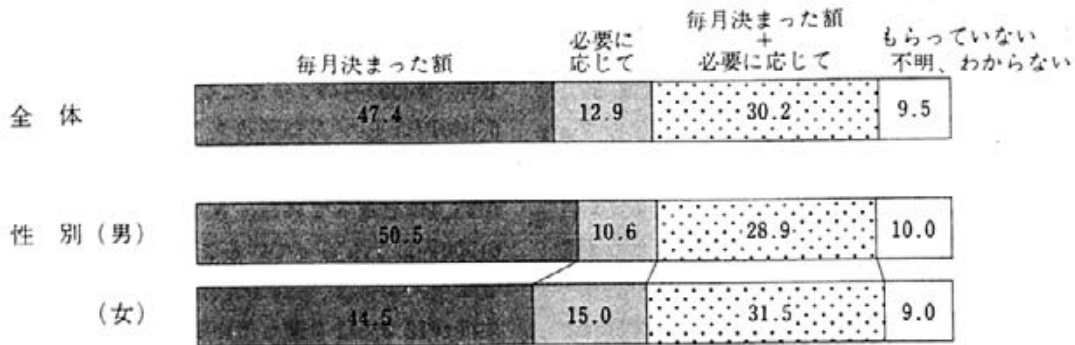
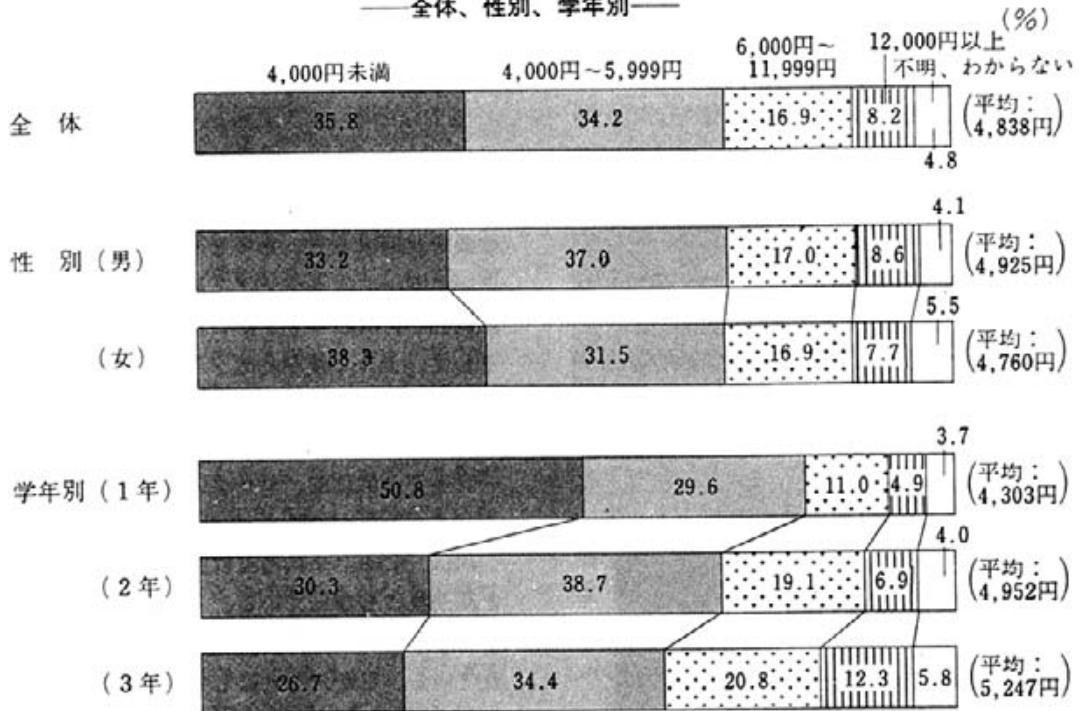


図2-2 小遣いの額 (月平均)

—全体、性別、学年別—



計画的に使っていることが予想されるが、では、予算、すなわち小遣いを彼らは月々どのくらいもらっているのだろうか。次に、図2-2から、高校生の月平均の小遣いの額についてみてみよう。まず全体をみると、月平均4,000円未満の生徒が35.8%でトップ、つづいて4,000円~5,999円が34.2%、6,000円~11,999円が16.9%、12,000円以上が8.2%となっている。全体の平均は、4,838円である。

ちなみに、LPレコードは1枚2,000円以上、コンサートは2,000円~3,000円といったところである。また、本の値段もちょっとしたものなら700円~800円はする。したがって、平均4,838円の小遣いは決して多すぎる額とはいえない。しかし、缶ジュースが1本100円前後、マンガ本が1冊170円~180円、立ち食いのハンバーガーが1個180円ということ考えると、決して少なすぎる額ともいえない。

次に、同じく図2-2で、性別、学年別に月平均の小遣いの額をみてみよう。

まず、性別にみると、男子は4,000円～5,999円がトップで37.0%、平均では4,925円である。これに対して、女子は4,000円未満がトップで、平均では4,760円となっている。この結果男子の方が、平均で165円ほど多くなっている。次に、学年別にみると、当然のことながら、学年が進むにつれて「収入」もアップしている。1年生では4,000円未満がトップで50.8%、平均で4,303円、2年生では4,000円～5,999円がトップで38.7%、平均は4,952円、そして

3年生は4,000円～5,999円がトップで、平均は5,247円となっている。学年ごとの平均をくらべると、1年から2年で約650円、2年から3年で約300円のアップになっている。なお、6,000円以上の「高額所得者」についてみると、1年生では15.9%、2年生が26.0%、3年生が33.1%となっている。3年生の3分の1が6,000円以上もらっていることになる。また、3年生の場合は、12,000円以上もらっている生徒が12.3%にも達している。12,000円あれば、経済面に関する限り、高校生活をエンジョイすることを保証されよう。

## 2. レコード(カセット)・ライブラリー

人気はフォーク・ニューミュージック、そしてロックに歌謡曲。伸び悩みはジャズ、クラシック。平均では1人35枚所有

レコード(カセット)の平均所有枚数をまとめたものが、表2-1である。ジャンル別に枚数を比較すると、もっとも多いのがフォーク・ニューミュージックで10.1枚、つづいて歌謡曲が9.8枚、ロックが8.1枚となっている。そして、大きく離されてクラシックが5.4枚、さらに大きく離されてジャズが1.6枚となっている。高校生の人気はフォーク・ニューミュージックと歌謡曲、ロックに3分されているようすがうかがえる。

次に、全体で平均所有枚数をみると、なんと35.0枚にもなっている。もちろん、この数字にはレコードだけでなく、カセットも含まれている。しかしそれにしても、高校生活と音楽のかかわりがここまで深いものは全く驚かされる。

ここで、ちょっと視点を変え、同じく表2-1から高校生のレコード(カセット)・ライブラリーを学年別にくらべてみよう。非常に興味深いことが明らかになる。その第一は、学年ごとに枚数の増えていくジャンルと、ほとんど増えないジャンルがあることである。増えていくジャンルは、ロックとフォーク・ニューミュージック、増えないジャンルはジャズとクラシック、歌謡曲である。表で、カ

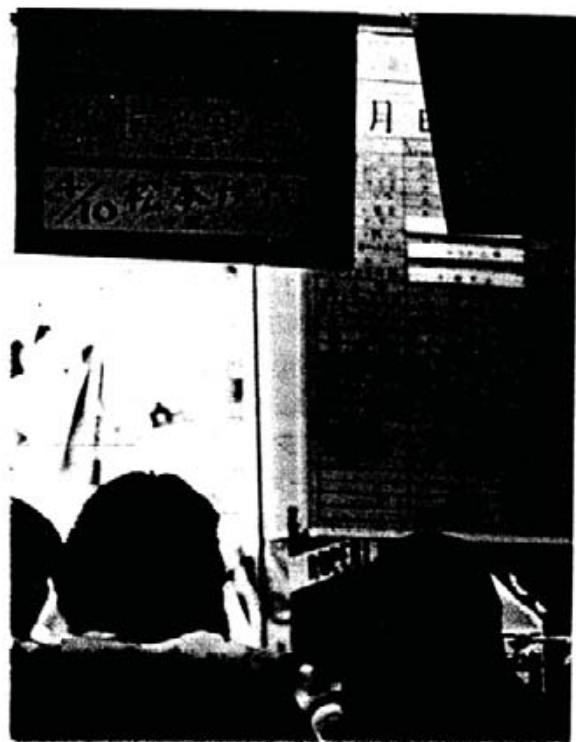


表2-1 レコード(カセット)所有数(平均枚数)

(枚)

	1年	2年	3年	全体
フォーク・ニューミュージック	8.7 (39.9)	10.2 (49.0)	11.3 (51.1)	10.1 (46.7)
歌謡曲	9.9 (44.0)	10.1 (45.5)	9.6 (41.4)	9.8 (43.6)
ロック	6.4 (23.4)	8.2 (27.9)	9.2 (31.9)	8.1 (27.8)
クラシック	5.3 (20.3)	5.5 (19.0)	5.3 (19.3)	5.4 (19.1)
ジャズ	1.7 (21.3)	1.4 (22.8)	1.6 (23.7)	1.6 (22.6)
計	32.0	35.4	37.0	35.0

注) ( )内は6枚以上もっている生徒の割合

ッコ内の数字はそのジャンルのレコード(カセット)を6枚以上もっている生徒の割合を示している。ここで、平均枚数が学年ごとに増えていかないジャンルでは、6枚以上もっている生徒の割合もあまり増えないのに対して、そうでないジャンルでは、6枚以上もっている生徒の割合も学年ごとに大きくなっていく。高校生は、学年が上がるにつれて、ロックとフォーク・ニューミュージックの世界に浸っていくということがいえよう。第二に興味深い点は、学年ごとのレコード(カセット)所有枚数の平均があまり増えていないということである。1人あたり平均で、1年生から3年生までの間に5.0枚しか増えていない。このことは、レコード(カセット)を買ったり録音したりする生徒の低年齢化を意味しているのではないだろうか。

さて、ここまでレコード(カセット)・ライブラリーを全体、および学年別にみてきたが、次に性別・学校グループ別にくらべてみたらどうであろうか。ここでも興味深いことがわかる。図2-3をみていただきたい。性別・学校グループ別に好みのジャンルが大きく異なっていることがみうけられる。ジャンル別に差異を追っていくと、まず、クラシックでは4年制大学進学希望率のもっとも高いAグループの学校の生徒が、男女ともにクラシック・レコードを平均で8枚以上(男子8.7枚、女子8.1枚)もっている。これに対して、B・C両グルー

プの学校の生徒は、最高のBグループの男子でさえ2分の1の4.4枚しか持っていない。さらに、B・C両グループを比較すると、4年制大学進学希望率がより高いBグループの生徒の方が、男女ともにわずかながら平均所有枚数が多くなっている。4年制大学進学希望率の高いグループの生徒ほどクラシックを好んでいるということができよう。

これと全く逆の傾向をみることもできるのは、歌謡曲のジャンルである。男女ともに、Cグループの生徒の平均所有枚数をもっとも多く、つづいてBグループ、Aグループとなっている。

ロックについては、学校グループ間の差異はほとんどない。しかし、男女間の差異が大きくなっている。女子の平均が5枚であるのに対して、男子では11枚と2倍以上になっている。

最後に、フォーク・ニューミュージックの分野については、各学校グループともに、男子の方が女子よりも所有枚数が多い。また、女子についてはグループ間に差異はないが、男子ではCグループがもっとも多く、つづいてBグループ、Aグループとなっている。

一般に、どのようなジャンルの音楽を好むかということと、どのような青年文化を志向するかということの間には、強い連関を予想することができる。ここで、図2-3でみた性別・学校別のレコード(カセット)・ライブ

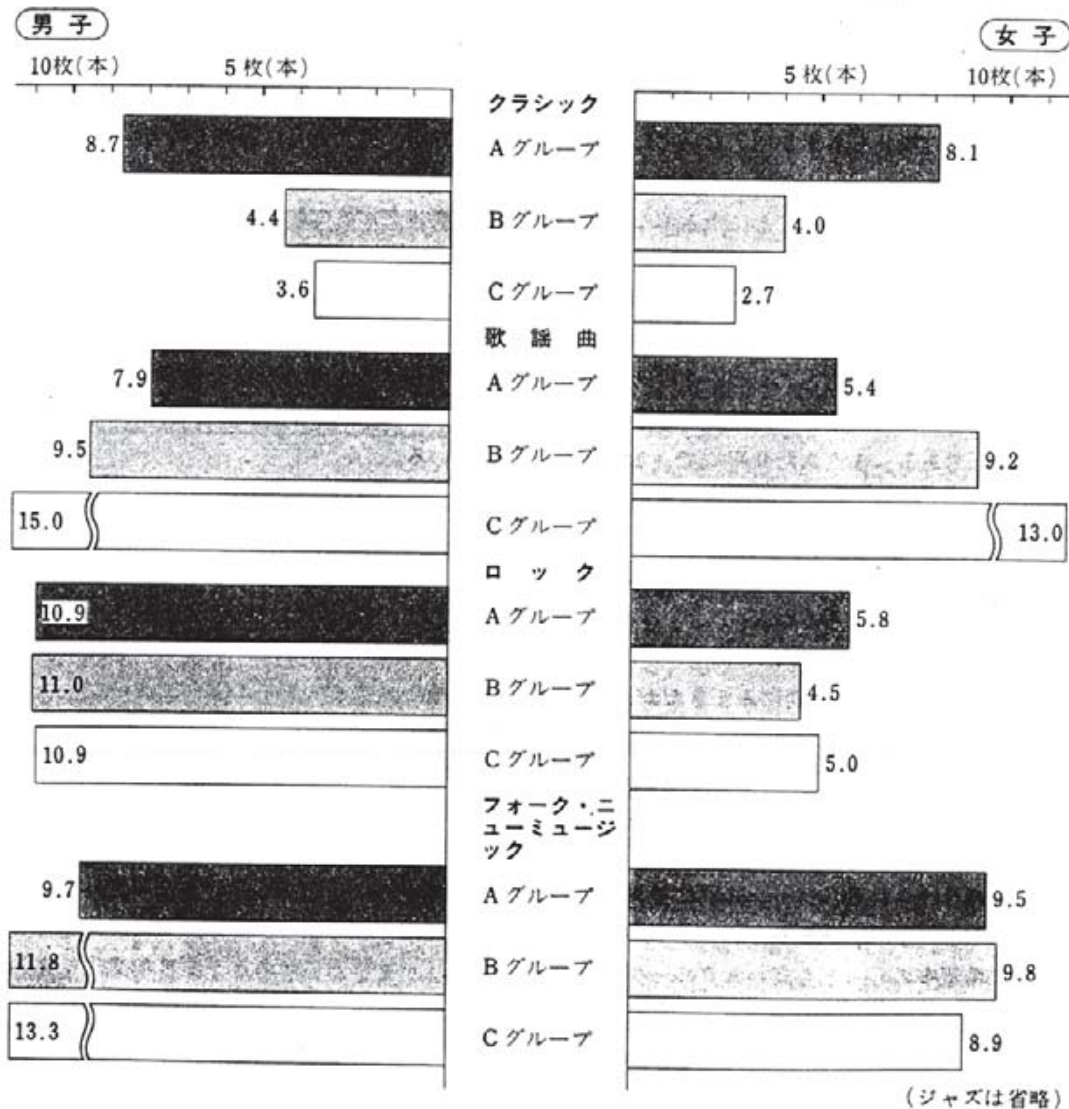
ラリーの特徴をもとに、高校生がどのような青年文化を志向しているのか、性別・学校別に調べてみよう。

まず、男子生徒についてみると、学校グループが上位の学校の生徒ほどクラシックを志向しており、彼らの志向する青年文化に成人文化の影響が色濃く反映しているようすがうかがえる。これに対して、学校グループが下位の生徒ほど歌謡曲やフォーク・ニューミュージックを志向しており、彼らが成人文化か

らある程度切り離された青年文化を志向していることが推測できる。ただし、ロック（ロックについては多様なものがあるので一概には言えないが、日本ではキャロル以来、RCサクセション、アナーキーなどのように、反体制的なグループに人気がある）への志向に関しては、学校グループ間にほとんど差異をみることができない。

女子については、やはり学校グループが上位のものほどクラシックを志向しており、彼

図2-3 レコード(カセット)所有数(性×学校グループ別)  
(平均枚数)



女らに対する成人文化の影響をみることができる。また、学校グループが下位の生徒ほど歌謡曲を志向しており、男子の場合と同じように、下位の生徒ほど青年独自の文化を志向しているといえよう。しかし、フォーク・ニ

ューミュージックについては、学校グループごとの差異は小さい。また、ロックについては、学校グループごとの差異はなく、さらに男子にくらべると、所有枚数は半分以下であった。

### 3. 高校生と本・雑誌

文芸書よりマンガや雑誌が本棚に並んでいる

最後に、高校生の読書の傾向をみてみよう。表2-2は、高校生の蔵書数をジャンルごとにまとめたものである。全学年を通してみると、もっとも多いジャンルは文庫本の24.0冊で、つづいてマンガ本の21.7冊、大きく離れて学習参考書・問題集の10.8冊、文芸書の8.2冊となっている。各出版社が文庫本に力を入れるようになった影響であるのか、高校生は文芸書の約3倍の文庫本を持っているわけである。そして、親や教師が嘆きそうなのが、マンガの単行本である。平均で21.7冊が本棚に並んでいるのである。しかし、いまや大学生どころかサラリーマンまでが、電車のなかでマンガを読む時代である。驚き嘆くよりも、マンガのなかに展開される若者の世界がどのようなものであるのか——生徒は単に、活字

表2-2 蔵書数 (平均冊数)

(冊)

	1年	2年	3年	全体
文庫本	21.0 (45.3)	23.0 (51.6)	27.6 (59.3)	24.0 (52.1)
マンガの単行本	23.5 (51.2)	22.5 (49.4)	19.5 (40.4)	21.7 (46.6)
学習参考書・問題集	8.3 (50.7)	9.9 (57.7)	13.7 (69.6)	10.8 (59.8)
文芸書(文庫本を除く小説や詩・評論)	7.5 (27.4)	8.4 (31.7)	8.7 (33.4)	8.2 (31.0)
計	60.3	63.8	69.5	64.7

注) ( )内の数字は、文庫本、マンガの単行本については、11冊以上もっている者の割合  
学習参考書・問題集、文芸書については、6冊以上もっている者の割合

を追うのを面倒がっているのではない——もう一度考えてみる必要がある。

さて、同じ表で学年ごとの平均蔵書数の推移をみると、おもしろいことに気がつく。マンガの単行本の平均蔵書数は、1年生がもっとも多く、つづいて2年生、3年生となっており、他のジャンルとは逆になっているのである。11冊以上持っている生徒の割合（カッコ内の数字）をみても、1年生が51.2%、2年生が49.4%、3年生が40.4%と、1年生、



2年生、3年生の順になっている。低学年で冊数が多いということは、若い世代ほどマンガへの親近性が高まっていることの現れと考えるとよいであろう。

最後に、月平均の読書量についてみてみよう。表2-3をみていただきたい。生徒たちがかもっともよく読むものは、マンガやコミックの3.4冊、つづいて趣味の雑誌が2.2冊、若者向けの雑誌・週刊誌が2.1冊で、もっとも少ないのが本や文庫本の1.4冊となっている。この

表から、まず感じられることは、高校生が本や雑誌を読む量が意外に多いということである。また、この表からいまの高校生は、本や文庫本といった堅いもの(と言っても、おそらく実際には純文学を読む生徒は少ないのであろうが)よりもやわらかいもの、若者向けのものを好んでいることがわかる。彼らは、出版界が創る(ないしは媒介する)やわらかい、そして彼ら独自の出版文化のなかに生きようとしているのである。

では、月平均読書量を性別・学校グループ別に比較したらどうなるであろうか(図2-4)。まず、小説・詩や評論などの本や文庫本については、男女間の差はほとんどみられない(男子1.6冊、女子1.2冊)が、しかし学校グループ間の差は大きくなっている。すなわち、4年制大学進学希望者の多い学校ほど、小説・詩や評論をよく読んでいる。マンガやコミック誌については、男子の方(3.8冊)が女子(3.0冊)よりも読書量が多く、しかも4年制大学進学希望者の少ない学校ほど多く読んでいる。趣味の雑誌に関しては、グループ間の差異は小さく、男女間の差異が大きくなっている(男子2.8冊、女子1.7冊)。すなわち男子の方が約1冊多く読んでいる。最後に若者向けの雑誌・週刊誌をみると、男子ではグループ間の差異が小さい。一方女子ではCグループ、Bグループ、Aグループの順で読む量が、変わっており、とくにCグループの女子は平均で2.9冊と男子および他のグループの女子を大きく引き離している。

以上のような平均読書量の性別・学校グループ別の比較を、青年文化との関連から整理すると次のようになる。すなわち、一般に男子の方が女子よりも、そして4年制大学進学希望者の少ない学校の方が多くの学校よりも、マンガやコミック、趣味の雑誌、若者向けの雑誌などの青年向けの出版物に親しんでいる。また、成人の文化と青年の文化のかけ橋になるだろうと考えられる小説・詩や評論については、4年制大学進学希望者の多い学校ほど親しんでいる生徒が多い。

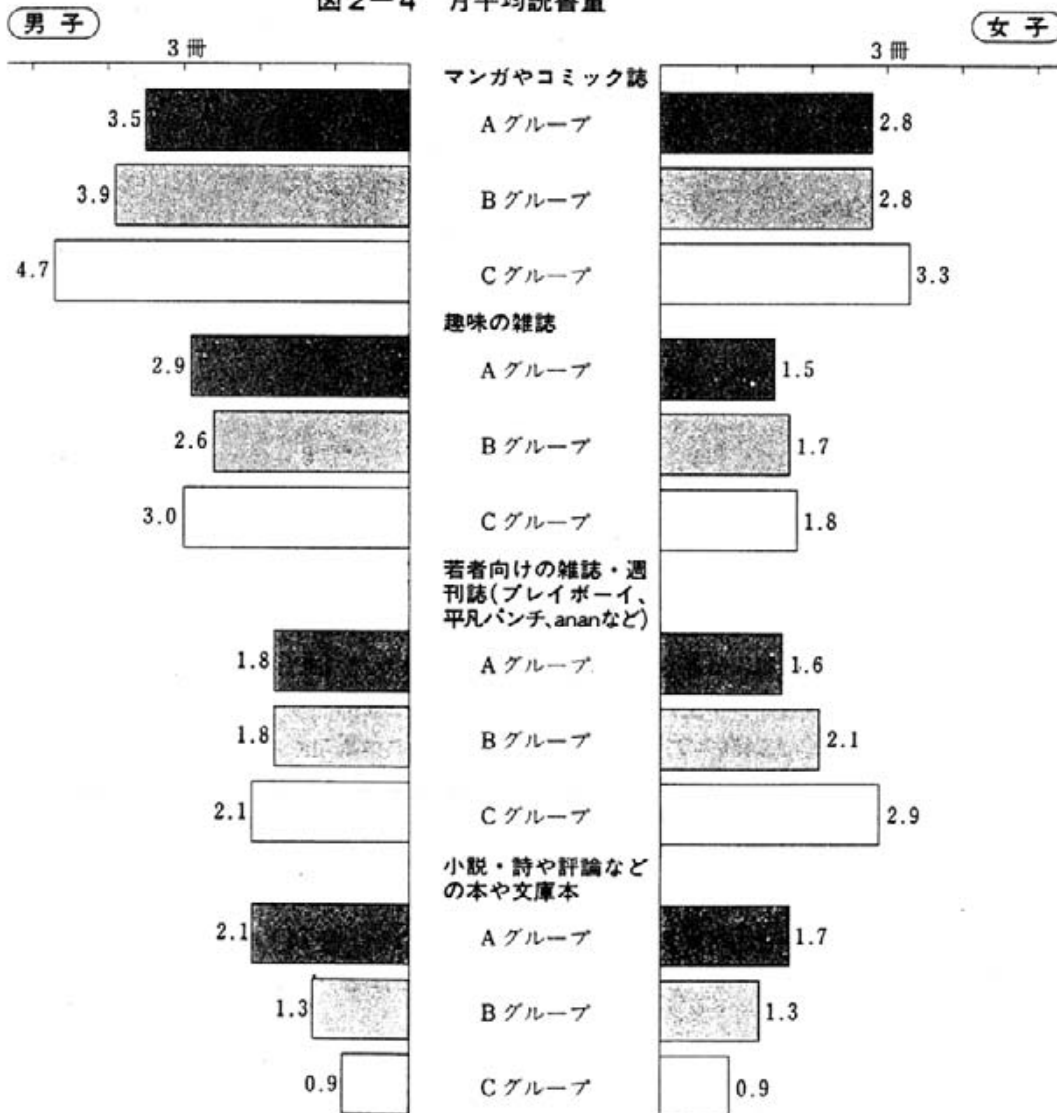


表2-3 月平均読書量

(冊)

	1年	2年	3年	全体
マンガやコミック	3.5	3.6	3.1	3.4
趣味の雑誌	2.3	2.3	2.1	2.2
若者向けの雑誌・週刊誌 (プレイボーイ、平凡パンチ、ananなど)	1.8	2.2	2.4	2.1
小説・詩や評論などの本や文庫本	1.5	1.3	1.4	1.4

図2-4 月平均読書量



## 4. 高校生と音楽・読書

---

高校生は独自の青少年文化を創り出す傾向をもっているが、それとのかかわり方に見られるグループ別の差異などに目を向けていく必要がある

本章では、現代高校生の校外生活のなかから、とくに音楽と読書に焦点をあて検討してきた。その結果、現代の高校生がロックやフォーク・ニューミュージック、そしてマンガや趣味の雑誌、若者向けの雑誌など、彼ら独自の文化を創りあげていることがわかった。しかしながら、同時にそうした文化とのかかわりが性別・学校グループ別に異なることも明らかになった。

高校生たちがどのような文化を創り出していくのか、それは彼らの自由裁量でなされるべきものかもしれない。しかしながら、彼らの創る文化が、性や学校のランクなどによって全く異なるようなものであってはならない。青年文化が生徒を仕分ける装置となってしまうからである。また、彼らの文化が成人の文化と没交渉になってもならない。青年文化が社会的不適応を助長する装置となってしまうからである。

## 🌀 学校の外の高校生

学校の外で高校生はどのような生活をしているのか。この章では、1. この1年間にした行動経験 2. 休日の過ごし方 の2つの側面から「学校の外の高校生」の生活をとらえてみたい。



今回の質問紙を作成するにあたって、われわれは、①学校の外の高校生に焦点をあわせ、②さらに、それを行動のレベルでとらえようと考えた。ごく当然のように思われるかもしれないが、そう考えたのには事情がある。つまり、われわれ研究グループは、これまでに学校のなかの高校生にのみ光をあて、学校外の生活に無関心でありすぎたのではないか。さらに、高校生の意識といういわばソフトな面を重視し、行動レベルでの把握は不十分だ

ったのではないか。

学校生活からは予想できなかったような新しい高校生がそこにいるかもしれない。さらに、校外での高校生の行動を理解することは、ひるがえって学校内での高校生の理解を一層深めることにつながるかもしれない。

こうした反省と期待の気持ちから、われわれは、1. この1年間の行動経験、2. 休日の過ごし方、の2つの設問を準備した。

## 1. 高校生の行動経験

### 1) 全体的傾向

高校生はどのような行動経験をもっているのか。この1年間に限定して25の行動経験の有無を問い、その結果を全体として経験率の高い順番に項目を並べたのが表3-1である。25の項目の1つ1つについて、その経験率の多寡を評価する基準をもたないので、いくつかの項目にふれながら、全体的傾向を概観することにしたい。

### 〈非行的経験〉

どのような行動経験が非行的であるかについては意見がわかれるだろうが、ここでは一応、法規・社会通念を目安として次の項目を非行的と規定して、その経験率をみってみた。

友人と酒をのむ	33.1%
タバコをすう	16.4%
オートバイ・バイクに乗る	16.2%
ディスコに行く	8.9%

一般に非行的とみられる行動のうち、友人と酒をのむことは33%ともっとも多くの高校生が体験している。性別にみると、男子=42.5%、女子=24.5%と差が大きくなっている。男子の40%以上が、さらに女子でも4人に1人がこの1年間に友人と酒をのんだ経験をもっている。

タバコについても性差が大きい。男子は10人に2人、女子は10人に1人の割合で喫煙経験をもっている。酒やタバコはいうまでもなく法律で禁じられているが、その実態は右の数字に、表れているとおりでである。無記名とはいえ、学級における質問紙による調査結果であることを考えれば、酒・タバコ経験者は数字以上に多いと考えたほうが妥当かもしれない。

オートバイ・バイクについては、今般、高校生に対して禁止措置をとる府県・学校が増えているが、今回の調査対象が都市部の高校

非行的な経験はトップが友人と酒をのむ(33%)で、次にタバコ、バイク、ディスコとつづく

表3-1 この1年間の行動経験

(%)

	全体	男子	女子	1年	2年	3年
友人と喫茶店に入る	77.3	71.7 <	82.6	61.4 <	82.7 <	86.7
電車やバスで席をゆずる	60.8	57.1 <	64.3	61.6	58.5	61.8
日記をつける	40.4	20.2 <	59.5	41.3	39.8	40.2
口紅をつける(女子のみ)	36.4	—	36.4	31.2 <	35.8 <	45.1
友人と酒をのむ	33.1	42.5 >	24.5	19.4 <	34.5 <	44.3
友人の家に泊まる	33.0	35.0	31.2	23.2 <	35.0 <	40.3
塾や予備校に通う	33.0	42.7 >	23.8	42.0 >	23.5	33.3
友人といっしょに旅行する	31.1	42.2 >	20.6	23.2 <	30.8 <	38.4
街で見知らぬ異性に声をかける (かけられる)	29.1	15.3 <	42.1	23.2 <	28.2 <	35.4
詩や小説を創作する(授業以外で)	28.1	20.2 <	35.5	27.6	28.3	28.2
アルバイトをする	25.4	25.2	25.4	13.8 <	28.5 <	32.8
ラジオやテレビにリクエストを出す	22.9	18.5 <	27.2	25.3	25.6	18.4
マージャンをする	21.6	33.6 >	10.3	16.9 <	20.3 <	26.9
パーマをかける	18.7	12.2 <	24.9	8.7 <	19.1 <	27.5
交換日記をする	17.2	4.9 <	28.8	23.9 >	15.3 >	12.8
タバコをすう	16.4	21.7 >	11.4	10.8 <	15.9 <	21.8
オートバイ・バイクに乗る	16.2	21.2 >	11.6	10.0 <	16.7 <	21.5
テレビ局や公開放送に行く	15.8	16.4	15.2	14.4	16.5	16.4
なぐりあいのけんかをする(ピンタを含む)	10.4	15.2 >	5.8	12.1	8.5	10.6
ラブレターを出す	10.0	9.2	10.7	13.1 >	8.0	8.9
新聞や雑誌の読者欄に投稿する	9.5	10.2	9.0	11.8	8.3	8.6
ディスコに行く	8.9	7.8	9.9	3.2 <	8.1 <	14.7
ひとりで旅行する	8.8	15.9 >	2.2	8.2	9.1	9.0
タレントのファンクラブに入る	8.3	6.6	9.9	7.3	9.1	8.5
同人誌やミニコミ誌(紙)をつくる	4.2	4.1	4.4	2.7	5.3	4.7

異性との交際のきっかけは、ラブ  
レターを書くより、ナンパや電話で  
しかし、文字や文章と全く疎遠なの  
ではない



であるために、全体として乗ったことのある者が16%と予想以上に多くなっている。

ディスコにいったことのある者は9%、女子ではほんのわずか高い。

酒、タバコ、バイク、ディスコ——これらは、一応、法規・社会通念により、高校生がまだしてはいけないことと考えられている。しかし、調査結果からみる限り、かなりの高校生がそれらの経験者である。数字の背後にある暗数を考えるとき、高校生の目からみると、酒、タバコ、バイク、ディスコは、それほど特異なもの、疎遠なものとはみえないのであろう。「おとな社会」の論理とは別に、「高校生社会」では、それらは決して非行や逸脱を意味しないというのが現実であると考えられる。

#### 〈異性・ラブレター〉

街で見知らぬ異性に声をかける（かけられる）——いわゆるナンパの経験者は、全体で約3割に達した。とくに、女子では42.1%、5人に2人がナンパされた経験をもっている。この数字のなかには、もちろん、街で声をかけられたがそのまま無視して通りすぎた者、つまり、完全なナンパとはいえないものも相当数含まれているに違いない。とはいえ、この数字は、いわゆるナンパが、高校生にとって、異性と接触する1つの重要な機会となっていることを示している。

それでは、かつては重要な異性との交際的手段であったと考えられる「ラブレター」はどうか。この1年間にラブレターを出した経験のある者は10%、半ば予想したとおりではあるが、きわめて低率であった。これには性差はほとんどない。ラブレターは異性との交際的手段として、明らかに一般的ではなくなっている。

異性とつきあいたければ、街で声をかければよい。気持ちを伝えたいならば口に出して言えばいい、電話だってある。それに昔のように街で男(女)の子と2人だけで歩いても目立つわけではないし、周囲の目もうるさくない。

こうした高校生のストレートさと、状況の変化を考えれば、ラブレターを書くなどという行為は面倒であり、もったいぶっていて、なにより不必要だ。このような異性との接触パターンの変化を、ナンパとラブレターの経験率の差の数値がはっきりと映しだしているようにみえる。

### 〈日記・創作と投稿・同人誌〉

ラブレターを出したことがある者が少ないからといって、高校生が、文字や文章からそれ程疎遠なのではない。

この1年間に日記をつけたことのある者は40.4%(特に女子では約60%)、詩や小説を授業以外で創作した経験のある者は28.1%(女子では35.5%)と、意外に思える程高い数字が出ている。

一方、文字や文章に関わる経験のなかでも、「新聞や雑誌の読者欄に投稿する」「同人誌やミニコミ誌をつくる」は、それぞれ9.5%、4.2%とかなり経験率が低くなっている。雑誌への投稿のなかには、マンガ週刊誌やカタログ誌への「ギャグ」や「人気投票」のような投稿が含まれていると想定されるから、まとまった文章としての投稿は、これより低く見つめる必要がある。

日記は本来、読者を想定しておらず、他者とのコミュニケーションではなく、自己とのコミュニケーションを目的としたものである。詩や小説にしても、この場合、投稿や、同人誌刊行者が少ないという事実からいえば、むしろ自己とのコミュニケーションの副産物として、かつ、それを主な目的として創作されていると考えることができる。一方、投稿や、同人誌・ミニコミ誌は、それ自体自己から離れた他者への発表機会であり、他者とのコミュニケーションを目的としている。

現代の若者は、映像メディアの発達により、文字や文章から疎遠であるといわれている。しかし、高校生があらゆる文字や文章から疎遠だというわけではない。彼らが疎遠なのは、文章のもつ他者とのコミュニケーション機能

に対してである。現代高校生は、文章を、私的な領域で自己とのコミュニケーションの手段として利用しているといえる。

## 2) 学年の上昇とともに広がる行動経験

高校生の行動経験は、学年の上昇とともにどのように変化するだろうか。表3-1から、学年の上昇とともに経験率の下がる項目をひろくと、「交換日記をする」(1年=23.9%→2年=15.3%→3年=12.8%)と、「ラブレターを出す」(13.1%→8.0%→8.9%)の2つだけである。残りの多くの項目では、1年<2年<3年のパターンを示しており、学年の上昇とともに、行動経験がぐんと広がることがわかる。その変化は、次のようにまとめることができる。

### ①非行的経験の増加。

- 友人と酒をのむ(1年=19.4%→2年=34.5%→3年=44.3%)
- タバコをすう(10.8%→15.9%→21.8%)
- ディスコに行く(3.2%→8.1%→14.7%)

### ②仲間との行動の増加。

- 友人と喫茶店に入る(61.4%→82.7%→86.7%)
- 友人と酒をのむ(前掲)
- 友人の家に泊まる(23.2%→35.0%→40.3%)
- 友人といっしょに旅行する(23.2%→30.8%→38.4%)

### ③口紅・パーマの増加。

- 口紅をつける(31.2%→35.8%→45.1%)
- パーマをかける(8.7%→19.1%→27.5%)

### ④アルバイトの増加。(13.8%→28.5%→32.8%)

学校のなかでの高校生は、学年が上昇して3年生になっても、基本的には生徒のままである。しかし、学校の外では、同輩集団とともに、酒やタバコをおぼえ、アルバイトによって労働世界の一端を垣間見、身体的発達とともに口紅やパーマで装いを変えていく。こうした行動経験の変化・広がりが、〈子ども〉から〈おとな〉への連続的移行であるかどうか

は別として、高校生は学校の外で、着実に「子ど

も」ではない行動経験を獲得していくのである。

## 2. 高校生の休日の過ごし方

次に、高校生の余暇である休日の過ごし方についてみてみよう。余暇は、通常労働と対置され、他者から直接的拘束を受けない自由な時間を意味する。自由であるはずの余暇生活に注目することにより、その人間の欲求・価値観の所在が明らかになると同時に、労働が彼らにとってもつ意味を浮かびあがらせることが可能となる。

同様に、時間的・空間的に学校を離れた高校生の休日の過ごし方をさぐることによって、高校生の欲求・価値観の所在、さらにはひるがえって学校生活のもっている意味が如実にあらわれてくるはずである。

### 1) 圧倒的に多い休息型

今回の調査では、休日(日曜日や祭日)の過ごし方を30項目あげ、各項目について「よくある」から「ときどきある」まで4段階で答えさせる方法をとった。休日の過ごし方として「よくある」の回答を多い順に並べかえたのが表3-2である。

上から選択の多い順に、

- フォーク・ロックなどの音楽をきく(48.5%)
- 何もしないでのんびりとすごす(38.6%)
- 歌謡曲をきく(31.6%)
- 本屋に出かける(29.9%)
- 友人の家に遊びに行く(21.4%)

と、並んでいる。ベスト3は、いずれも家のなかで「のんびりと」すごすタイプである。フランスの社会学者ティマズディエは、余暇生活の機能として、休息、気晴らし、自己開発の3つを指摘している(ティマズディエ「余暇文明へ向って」中島巖訳 創元社)。この観点からいえば、高校生の休日の過ごし方は、休息・気晴らしにぐっと傾斜しており、自己開発に関わる行動は非常に稀であるとい

うことができる。

休息型余暇の他に上位で目立つのは、「友人の家に遊びに行く」「友人とショッピング・街をぶらつく」など、仲間といっしょの行動である。スポーツ・ハイキングなどのアクティブな過ごし方、あるいは、趣味的活動は下位に集中している。

こうした休息を志向した休日の過ごし方は、生徒の属性により、やや趣を異にしている。属性による差異をまとめると次のようになる。

### 〈性別にみた休日の過ごし方〉(図3-1)

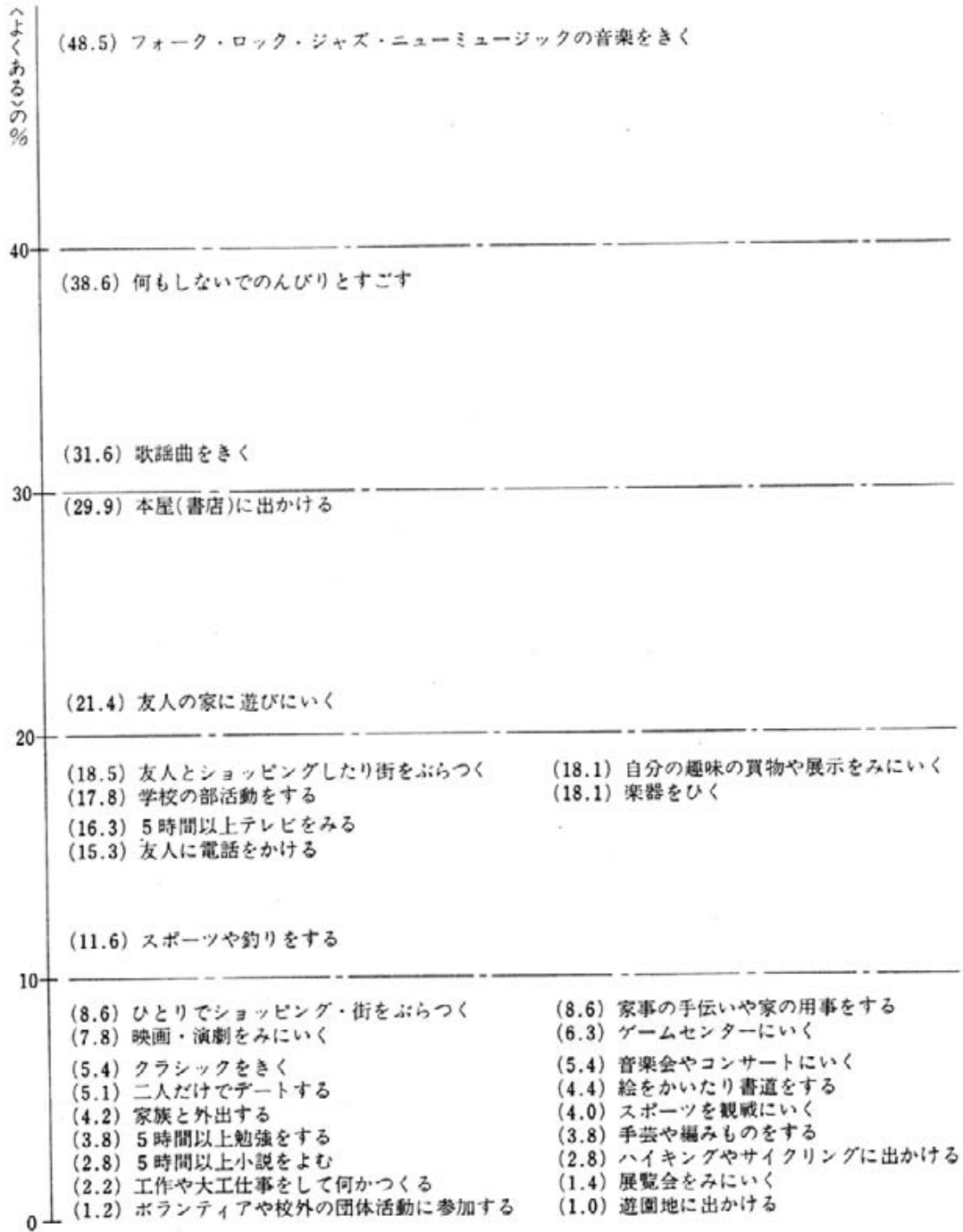
- ①男子は「のんびりすごす」「5時間以上テレビ」が多い。一方、女子はその代わりに、「家事の手伝い」「手芸・編みもの」「歌謡曲」が多くなっている。
- ②同じ街へ出る行動でも、男子は全体に「ひとりで」、女子は逆に「友人と」出かけることが多い。
- ③男子に、「スポーツや釣り」「学校の部活動」といったアクティブな過ごし方が目立つ。

### 〈学校グループ別にみた休日の過ごし方〉(図3-2、図3-3)

- ①音楽についてくればると進学率上位のAグループで多いのが「クラシック」、逆に、進学率下位のCグループでは、「フォーク・ロック・ニューミュージック」「歌謡曲」が多くなっている。
- ②街へ出かける行動をくればとみると、Aグループでは「自分の趣味のための買物や展示をみに行く」「ひとりでショッピングをしたり街をぶらつく」が多いのに対し、Cグループでは「友人とショッピングしたり街をぶらつく」が多い。さらにCグループでは「友人の家に遊びに行く」「友人に電話をかける」も多く



表3-2 休日の過ごし方



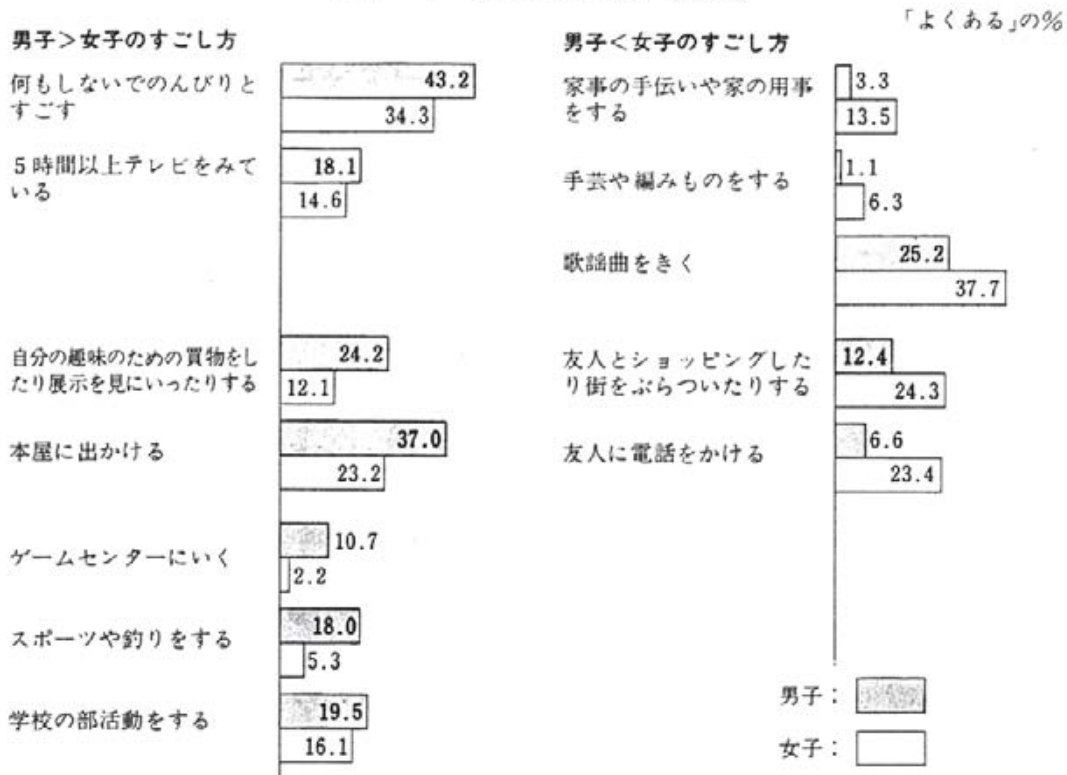
なっており、休日の過ごし方のなかで仲間と過ごす行動の比重が大きくなっている。

③家のなかでの過ごし方については、Aグループで「何もしないでのんびり」「楽器をひく」

「5時間以上勉強」が多く、Cグループで「5時間以上テレビ」が多い。

④「スポーツ・釣り」をして過ごす者がAグループ、Bグループに多い。

図3-1 休日の過ごし方(性別)



## 2) 休日の過ごし方の構造

このように、高校生の休日の過ごし方は全体として休息に重点がおかれながらも、その休息のとり方や仲間とのつきあいの頻度において性別・学校グループ別に差がみられる。

この点をもう少し詳しく明らかにする意味も含めて、休日の過ごし方についての回答結果に因子分析を施してみた。因子分析法は、互いに連関の高い質問項目同士をグループにまとめ(このグループを因子とよぶ)、いくつかの質的に異なる因子を質問項目から抽出するためのデータ解析法である。実際の高校生の行動に忠実な形で休日の過ごし方の構造を明らかにすることによって、学校の外の高校生像をいっそう整理された形で示すことができる。

因子分析の適用の結果、表3-3のように5つの因子が抽出された。友人との行動を表す〈つきあい〉、〈スポーツ〉、ひとりでする行動、あるいは趣味的活動に関わる〈個人・趣味〉、

家庭内での手芸、絵、家の手伝いを意味する〈家庭〉、のんびりテレビでもみながら過ごす〈休養〉——以上、休日の過ごし方を、5つの領域に分類することができたわけである。各因子(領域)を具体的に特質づける行動については、表3-3の中段をみてほしい。

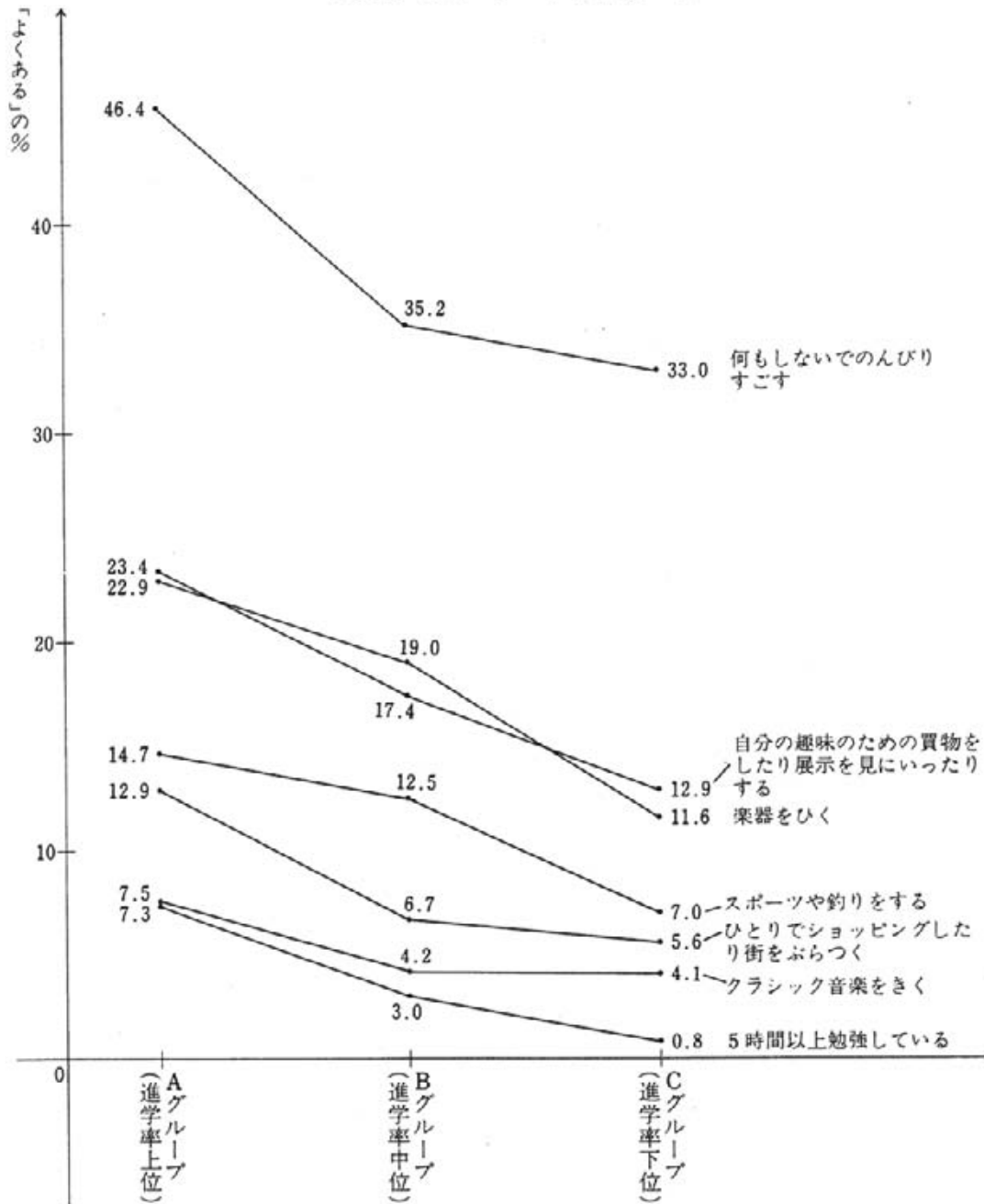
こうして析出された5つの因子(休日の行動の領域)を基準にして、次に、属性別に休日の過ごし方のプロフィールを描いてみることにしよう。

### 〈学年による差は小さい〉

図3-4は、各領域での行動が学年の上昇にともなってどのように変化していくのかを表している。図上、±0を基点として左側に位置するほど、そうした休日の過ごし方をすることが多いことを示している。

図3-4が示しているもっとも重要なことは、学年の上昇にともなう休日の過ごし方の変化が、予想をはるかに下まわっていることである。図3-5以下のグラフと比較すれば、このこ

図3-2 休日の過ごし方（学校グループ別(1)）  
A>B>Cのパターンをとるタイプ



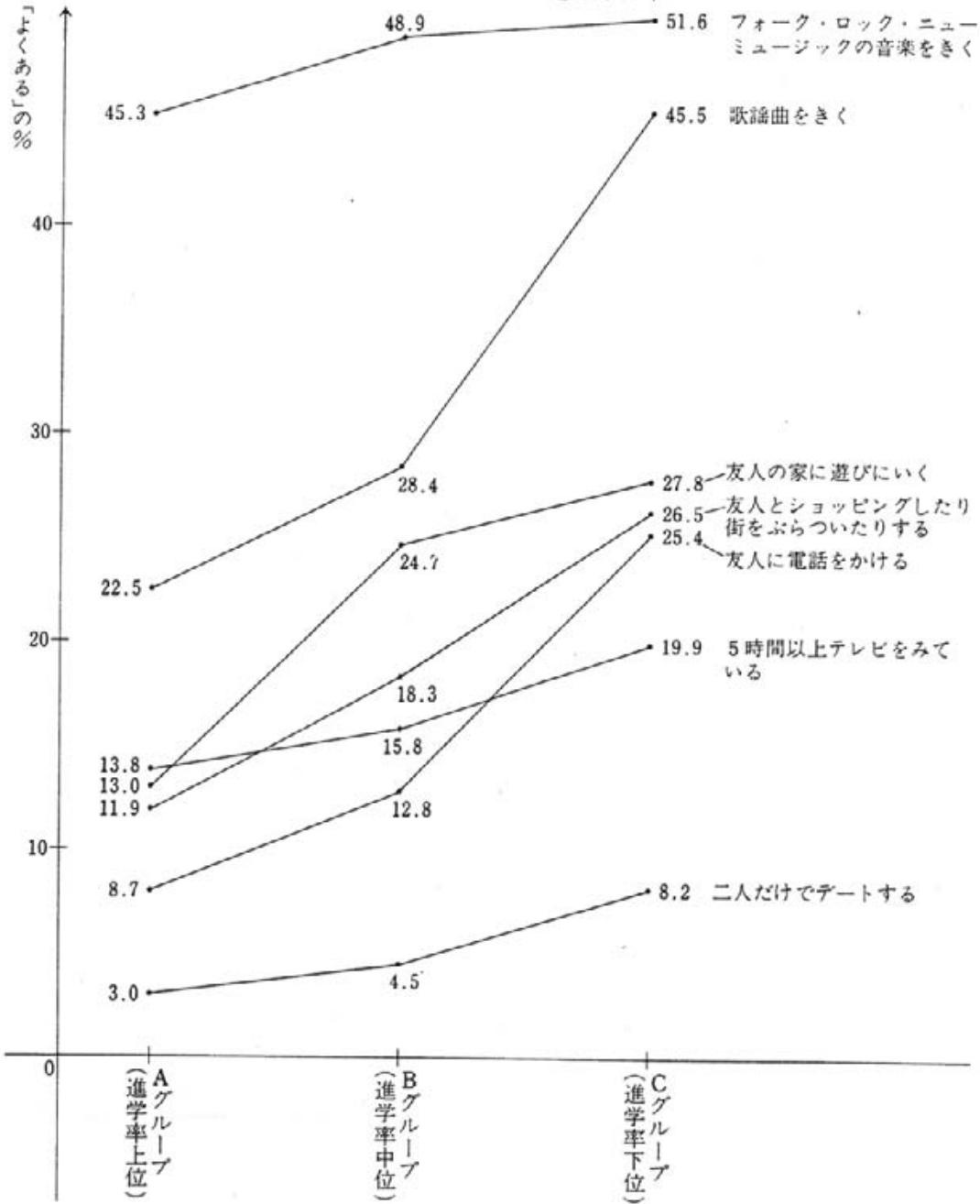
とは明確である。友人とのつきあいが2年生でもっとも活発になること、学年が上がるにつれ活動的なスポーツから疎遠になり、また、学年が上がるにつれ5時間以上テレビをみたり歌謡曲をきいて過ごすなど休養的行動が少なく

る——こうした傾向は確かにみられるものの、顕著であるとはいえない。

学年による差が予想以上に小さい、と書いた。というのは、前項で学年の上昇とともに非行的経験、仲間との行動などがふえ、全体

図3-3 休日の過ごし方(学校グループ別(2))

A<B<Cのパターンをとるタイプ



として行動経験が広がっていく傾向がみられたからである。このことから、学年によって休日の過ごし方はもっと異なっていると予想したのであった。しかし、図3-4を  
図3-5以下とくらべてみると学年による差は

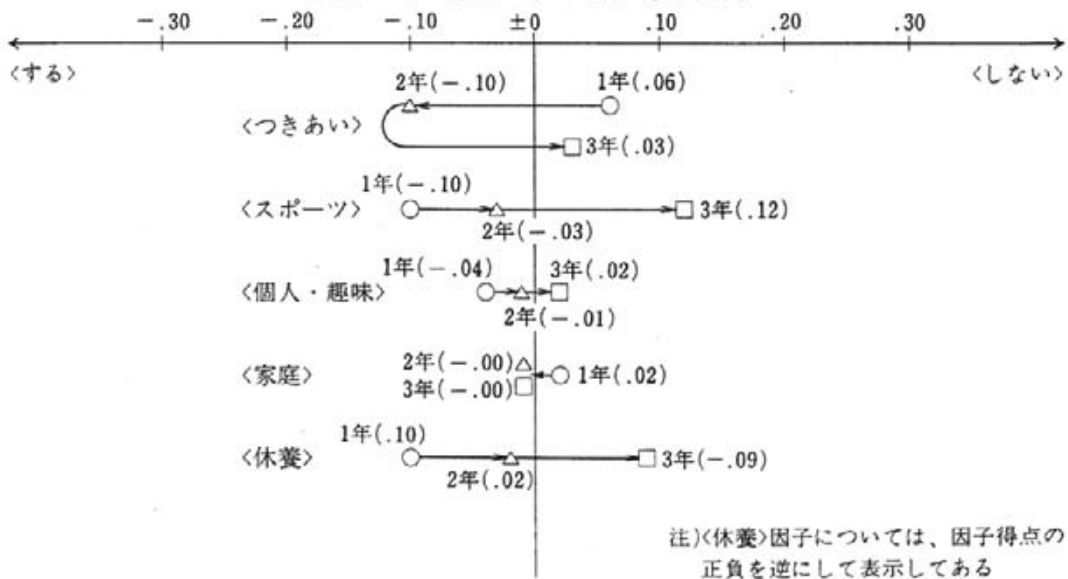
それほど顕著とはいえない。同じ行動ではあっても、この質問紙ではとらえられないような質的側面での変化が学年によって生じているのかもしれない。あるいは、高校生の余暇生活のうち、今回は調査しなかった部分——平

表3-3 休日の過ごし方 (因子分析結果)

因子の名称	第1因子 つきあい	第2因子 スポーツ	第3因子 個人・趣味	第4因子 家庭	第5因子 休養
因子を特徴づける変数	友人とショッピング、街をぶらつく (.73)	スポーツや釣りをする (.69)	自分の趣味のための買物や展示に行く (.63)	手芸や編みものをする (.61)	5時間以上テレビをみている (-.42)
	友人に電話をかける (.64)	スポーツを観戦に行く (.56)	本屋(書店)に出かける (.60)	家事の手伝いや家の用事をする (.53)	歌謡曲をきく (-.36)
	友人の家に遊びに行く (.61)	ハイキングやサイクリングに出かける (.56)	ひとりでショッピングしたり街をぶらつく (.49)	絵をかいたり書道をする (.45)	クラシックをきく (.33)
	二人だけでデートをする (.45)	学校の部活動をする (.37)	展覧会をみにいく (.38)	家族と外出する (.34)	何もしないでのんびりと過ごす (-.32)
因子寄与率	43.1%	23.8%	15.6%	10.1%	7.3%

注) 因子寄与率: 「因子構造全体の中でその因子がどれくらい分析に有効であるかを示すもの」 ( )内は因子負荷量

図3-4 休日の過ごし方 (学年別)



女子は友人とのつきあい（ショッピング、電話、おしゃべり）、男子はひとりですぽーツ、趣味で過ごすことが多い

日の放課後が、高校生の行動経験を広げるうえで重要な意味をもっているのかもしれない。

### 〈つきあい派の女子、スポーツ、個人、趣味型の男子〉

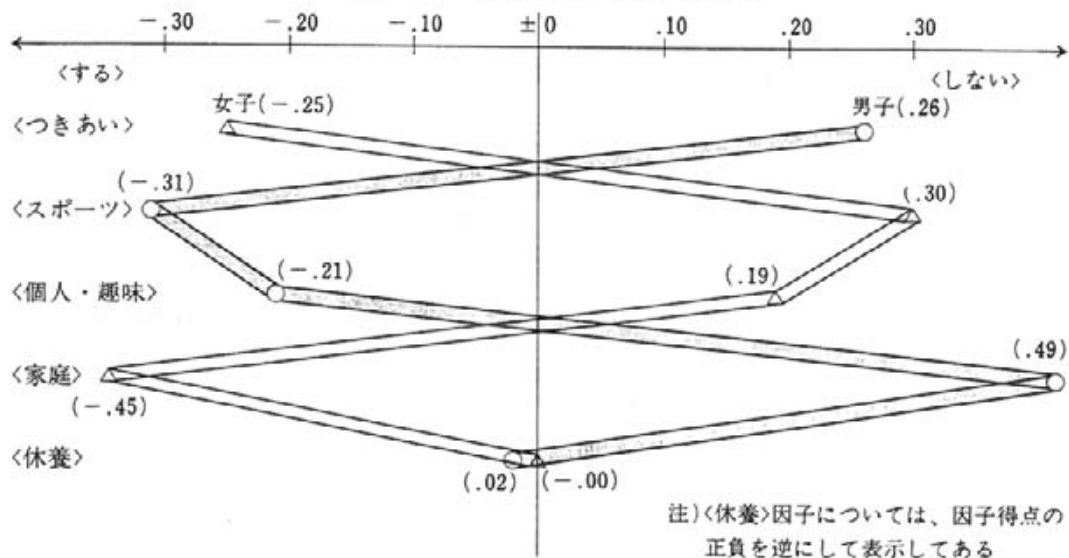
それでは、性別にみるとどうだろうか（図3-5）。

女子では、友人とショッピング、友人に電話、友人の家に遊びに行くなど、友人とのつきあいが、きわめて活発である。こうしたつきあい派の女子に対して、男子はスポーツ領域、個人・趣味領域での活動が多い。男子では友人とのつきあいに休日をあてる傾向は小さく、買物や街に出るにしても、ひとりで、しかも、趣味の買物や展示、展覧会などのために行くことが多くなっている。

### 3) 学校生活と余暇生活

ここまでは、高校生の生活のなかの余暇の部分にだけ着目してきた。しかし、おとな社会での生活に立ち戻って余暇生活を考えてみ

図3-5 休日の過ごし方（性別）



でも明らかなように、労働と余暇は切っても切り離せない関係にある。同じように、高校生にとっても、学校生活と余暇生活は密接に関連しているはずだ。

### 〈つきあい派のCグループ、個人・趣味派のAグループ〉

「モノグラフ高校生'80 Vol.2、高校生の生徒文化」において、われわれは、学校のなかの高校生の文化(意識や行動様式)に注目した。そのなかで、同じ高校生ではあっても、在学する学校のランク(進学率を指標とした学校グループ)によって、生徒の学校生活が大きく異なることを明らかにした(特にVol.2、VI章)。進学率の高いAグループの学校では学校適応的な文化が、逆に進学率の低いCグループの学校では、学校不適応的な文化が優勢であった。それでは、学校の外での生活に、学校グループによる差異がどのように出ているだろうか。

図3-6は、前項で析出した5つの領域につ

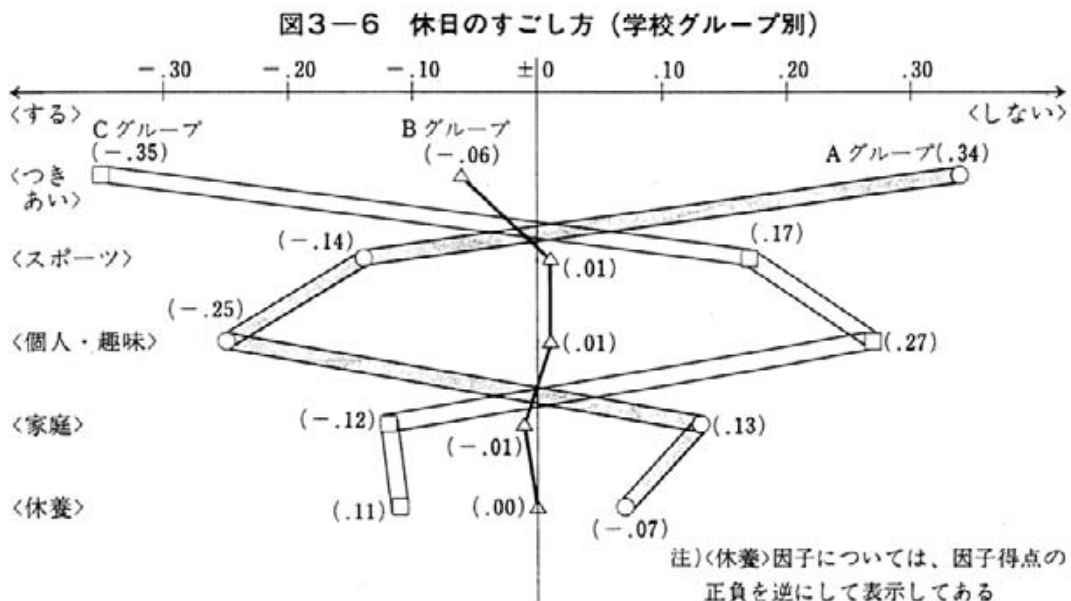
いて学校グループ別に休日の過ごし方を示したものである。

Aグループの特徴は、友人とのつきあいによって休日を過ごす傾向が小さく、個人的行動や趣味に関わる活動が多いことである。一方、Cグループは対照的に、ひとりよりも友人との行動が多く、つきあい重視派として特徴づけることができる。休日の生活に占める仲間集団の比重が大きいのである。Bグループはいずれの領域でもA、Cグループの中間に位置し、その特質を指摘することはできない。

進学率を指標として学校グループを構成したとき、Aグループ、Cグループの間には、休日の過ごし方、とくに仲間集団との行動について、顕著な差異がみられた。学校生活についても両グループ間で異なる傾向があることを考えあわせると、学校グループによって生徒の生活全体が異なる様相をおびているものと考えられる。

### 〈学校適応と休日の過ごし方〉

ここで問題となるのは、学校グループによ



る休日の過ごし方の差異が、グループ間にみられる学校生活の差異と無関連に生じているのかということである。言葉をかえれば、学校生活において生じた何らかの原因により、休日の過ごし方や余暇のあり方が規定されているといったことが、ありはしないかという問題である。

われわれが、この問題を明らかにするために注目したのは、学校への適応度と大きな関連をもっている「学業成績」であった。前記調査結果によれば（モノグラフ高校生'80、Vol. 2）、学業成績が上位であると自己評価する生徒ほど学校への適応度が高い傾向があった。だとすれば、学業成績と休日の過ごし方に関連が見い出された時、休日の過ごし方と学校生活のあり方（学校への適応度）は、学業成績を媒介として関連づけられることになる。学業成績は、学校生活のあり方と、休日の過ごし方を結ぶキーではないかと考えたのである。

まず、休日の過ごし方と学業成績の関連をみてみよう（図3-7）。スポーツ、個人・趣

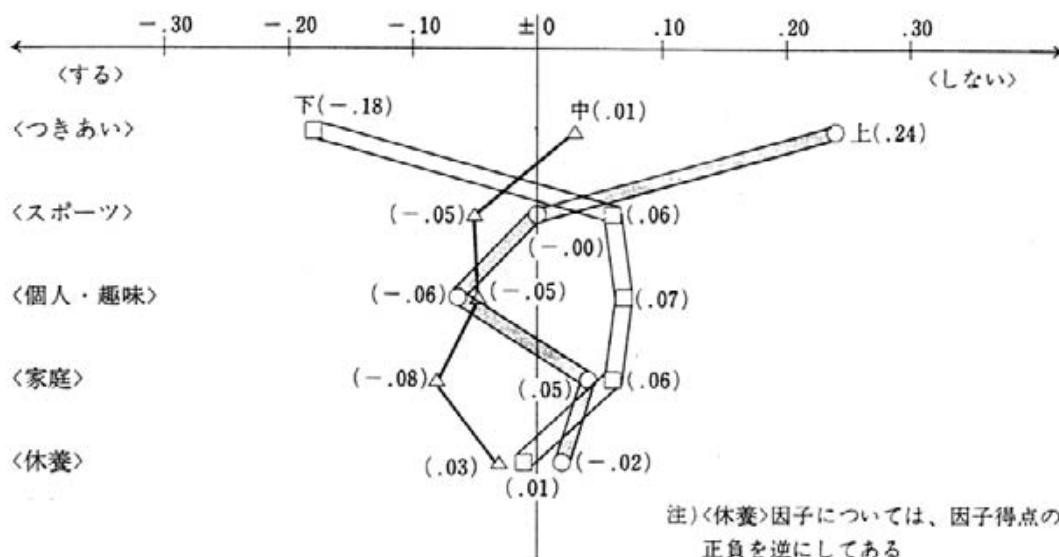
味、家庭、休養については、はっきりした関連がみられないものの、つきあいについては明確な成績差がある。成績上位者ほど、休日の過ごし方における友人とのつきあいの比重が小さく、下位者ほど大きくなっている。成績上位者ほど学校への適応度が高いという先行研究の調査結果を援用すれば、学業成績を媒介として、学校生活（学校への適応度）と休日の過ごし方は結びつき、図3-8のような関連をもっていることが予想される。

この図式についてデータを使って確認してみよう。

図3-9は、学校生活における行動や意識を表すいくつかの項目をえらんで、〈つきあい〉因子と〈休養〉因子の因子得点をプロットしたものである。図示した項目はいずれも、学校への適応度とかかわりの深い生徒の意識や行動である。

まず、「学校の規則を破ることがある」「先生に反発を感じる」という2項目に注目してみよう。両者ともに、その頻度が多いほど学

図3-7 休日の過ごし方（校内成績別）

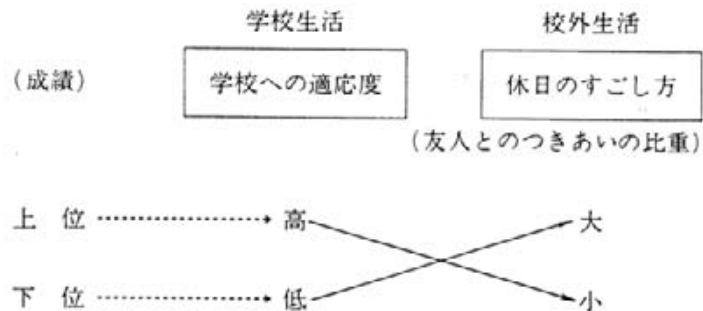




校適応度が低く反学校的であるとみることができる。この2つの項目は、その回答によって、図上X(横)軸とほぼ平行に動いている。先生に反発を感じることで、学校の規則を破ること、これらの頻度が高いほど、休日の行動において仲間集団とのつきあいの比重が大きくなっている。休日におけるつきあいが、学校内における反学校的意識・行動と強く結びついているのがはっきりわかる。

学習や授業にかかわる項目についてはどうか。「授業が難しくわからない」と感じる人が多い者ほど、また「先生にわからないことを質問する」ことが少ない者ほど、仲間集団とのつきあいの比重が大きい。さらにこの2項目については、図上Y(縦)軸方向にも変動がみられる。授業が難しくよくわからない生徒ほど、「5時間以上テレビ」をみたり「歌

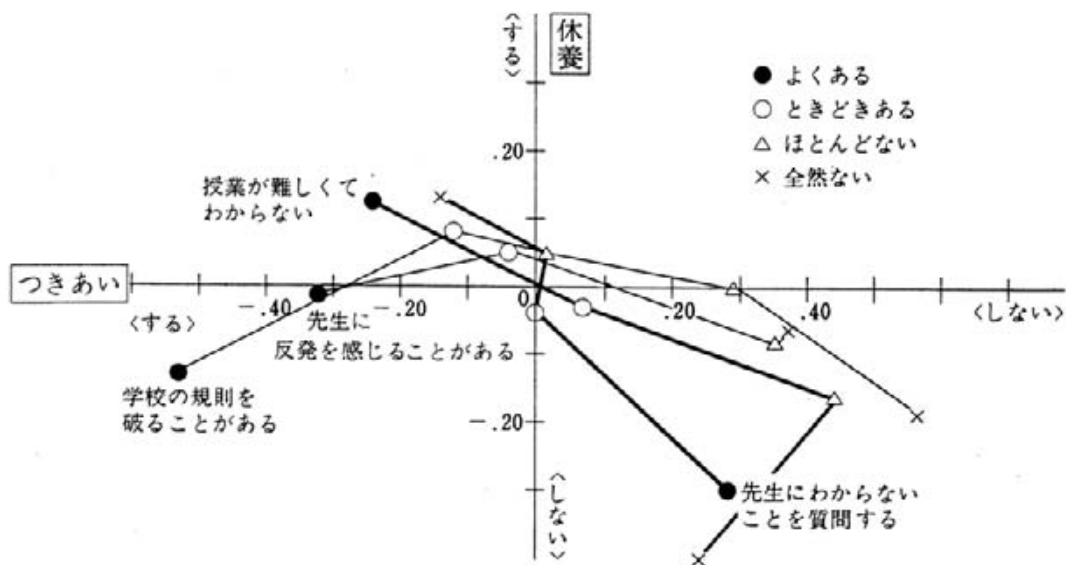
図3-8 学校適応と休日の過ごし方



謡曲をきく」などの休養的過ごし方をする傾向が大きくなっている。

図3-10は、学習や授業に関わるこの2つの項目について「個人・趣味」領域での傾向をみたものである。ここでは、友人とのつきあいとは逆の関係がみられ、授業がよくわからず、先生にもあまり質問しない生徒ほど、個人的・趣味的活動に休日をあてる傾向が小さい。先にふれた反学校的意識・行動を表す項目につ

図3-9 学校生活と休日の過ごし方



学校不適應な生徒ほど、仲間集団に  
傾斜した休日をすごしている



いては、この傾向はみられない。学習に対する意欲の喪失は毎日の授業での精神的苦痛・疲労をいっそう大きなものとし、5時間以上テレビをみるといった休養を要求する。それは他方で、疲れた自我をいやしてくれる仲間集団との強力な結びつきを生み、学習に意欲をもてない生徒から、個人的・趣味的活動にあてる時間を奪っているのかもしれない。

#### 〈問題解決の場としての仲間集団〉

以上の結果は、次のようにまとめることができる。余暇生活のあり方(休日の過ごし方)は、学校のなかでの生徒の生活とは無関係ではない。成績が下位であること、そしてその結果である学校への不適應は、休日における仲間集団とのつきあいへ生徒をかりたてる。反学校的生徒、授業についていけない生徒の休日の過ごし方は、仲間とのつきあいに大きく傾斜している。

おそらくは、学校不適應な生徒の生活のなかで、仲間との交際、つきあいはきわめて大きな意味をもっているに違いない。それは、休日を共にすごすだけにとどまらないだろう。勉強が難しくついていけぬ高校生にとって、授業は大きな苦痛だろう。校則や先生に反発をおぼえる生徒にとって学校生活は不自由で不快なものに違いない。では、そうした学校に適應できない生徒が、疲れた自我をいやし、自由で楽しい生活を送れるのはどこか。彼らはこうして、仲間集団と行動をともにし、つきあいに大きく傾斜した休日をすごすことになる。この意味で仲間集団は、学校不適應という問題を解決する、不可欠な場所として機能している。

青少年の仲間集ごもり、反学校的仲間集団など、仲間集団のネガティブな側面が強調されることが多い。しかし、だからといって当の生徒の非をとがめるだけでは問題は解決しない。生徒を仲間集団へと方向づけ、そこに集ごもりさせているのは、学校のあり方自体なのである。あるいは極端にいえばこうもいえるかもしれない。学校不適應な生徒が学校

の外で仲間と行動をともし、それによって欲求不満を解消しているからこそ、まだしも学校内の秩序が維持され「学校」が成立している、と。

学校の外の高校生の生活をみてくるうちに、

高校生にとっての仲間集団のもつ意味、そして学校との関わりがクローズアップされてきた。次章では、その仲間集団に焦点をあわせることにしよう。

図3-10 授業と休日の過ごし方〈個人・趣味〉

